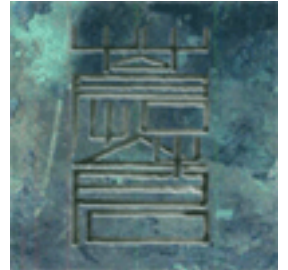




縄文巨大石棒の謎 (第23回)

電子礫・蒼蒼



(2023年3月1日掲載)

中村公省

東京都町田市在住。1941年生れ。1965年北海道大学教育学部卒。(株)蒼蒼社及び21世紀中国総研主宰。主著『毛沢東著作年表 上下巻』(京都大学人文科学研究所刊)

ヤマネコとカエルと蛇と月

はじめに

1. 黒駒土偶はオオヤマネコ Lynx を模したものか
2. ヤマネコ土偶と町田市藤の台遺跡出土の顔面把手
3. エリアーデによるシャーマンと動物の関係
4. ヤマネコ土偶の「三本指」は呪術成就のVサイン
5. 縄文中期土器のカエルと馬王碓帛画の蝦蟇
6. 「竹取物語」、「万葉集」と『月と不死』
7. 「月の水」と蛇と土偶の頭
8. 縄文人は月の「生」に自分自身を再認識した
9. 農耕の発見と宗教革命

はじめに

山梨県御坂町上黒駒の畑から 1917 年（大正 6 年）に出土した土偶、通称「ヤマネコ土偶」は特異な土偶です。

土偶とは、土でつくったヒトガタのことですが、この土偶はネコガタのごとくです。両目、両眉が鋭く吊り上がって、鼻の下は三ツ口で歪んでいます。頭の上の左右には耳のような突起がある、顔の下部は横一線で下顎がない——ここから、否応なくネコを連想させられます。

しかし、首筋を伸ばし立っていて、両腕があるが両足はないところから見て四つ足ではない。ヒトがネコの仮面を被っている姿と見られます。土偶はほとんどが女ですが、この土偶は性別不詳で、乳房がない、臍（へそ）から鳩尾（みぞおち）にかけての妊娠線もなく、土偶と言うのは憚られます。

胸にかざした左手の三本指はイミシンです。三本指は、同時期、同地方（鋳物師屋遺跡）出土の中空土偶「ラヴィ」、などにも見られるところです。ウエストは極度にしぼられています。

裏に回って見ると、複雑な形をしています。一番上は頭でほぼ台形を呈し、後頭部に真丸い空洞が空いています。頸から両肩にかけては八の字に垂れた大きな錘（おもり）が異常な存在感で、頭をしっかりと、安定的に支えています。一番下の背中は特別に作り出しているかの如くで背骨で二分されています。

横から見ると、頭は空洞に近い。顔面と後頭部の真丸空洞の間に、八の字型の粘土紐があるばかりで中はカラッポのごとくです。この頭のつくりは、鋳物師屋遺跡「ラヴィ」と酷似しています。

表、裏、横の三方向に共通して見られるのは、皮膚あるいは毛皮の毛の生え際かと思われるポツポツした小孔です。表の場合は両肩の部分にポツポツ、裏及び横から見ると、八の字に垂れた錘はすべてポツポツで覆われ、両肩の部分にもポツポツがあります。この小孔は刺突具（おそらく切断した鳥の羽軸）を粘土に押しつけたと推定されます。

「土偶」のつくりは中実ではなく、技量を要する中空構造です。

土偶＝ヒトガタが何者かがわからないで呻吟しているところに、また、ネコガタとは、これ如何に？

図1 黒駒土偶（高さ 25.4cm、縄文時代中期）



（資料）東京国立博物館

私は、これまで土偶＝ヒトガタはシャーマン（呪者）の呪術具であると見なしてきましたので、このネコガタにも持ち手を想定してみたいと思います。即ち、上黒駒土偶＝ネコガタ土偶は、縄文中期中葉のシャーマン（呪者）の呪術具であると仮定します。

土偶＝ヒトガタは偶像崇拜の偶像そのもので、偶像はヒトです。ネコガタは、ネコの仮面をかぶったヒトで、偶像はヤマネコと思われます。両肩に八の字に垂れた大きな錘（おもり）は、あとで証拠を示して考察しますが、シャーマンが仮面を被る装置と思われます。この「ヤマネコ土偶」は、恐らくヤマネコの精霊が偶像化されていると想定されます。

仮面土偶の場合は、姿形の知れない精霊を実体化した偶像があり、それを崇める呪術依頼人＝信者としての一般縄文人がいて、その間にシャーマンが存在しています。シャーマンが被っている土偶の仮面は精霊の顔であり、ヤマネコの精霊を実体化させたフェティッシュ（呪物）です。しかし、土偶の体の方は、シャーマン自身のカラダであって、ヒトのものであります。そして、一般縄文人は、仮面を被った精霊と、精霊とコンタクトし得るシャーマンを仰いでいる構造にあります。むしろ、フェティッシュ（呪物）の仕掛人はシャーマンに他なりません。

この三者（フェティッシュ＝呪物、呪術依頼人＝信者、シャーマン＝呪者）の関係を、きちんと捉えることが、土偶を考えるに当たっては、重要だと思います。さらに、フェティッシュ＝呪物には、つくり手があります。粘土をこね、乾燥し、焼成する、場合によっては着色する。この作り手はシャーマン＝呪者自身であったとも考えられますが、異なった遺跡から同類の土偶が発見されること、技術的に高度の制作技術を要するところから、専門の土偶づくりスペシャリストが存在したと想定しておくべきでしょう。具体的には、シャーマンの求めるフェティッシュ（呪物）によって、専門の土偶づくりが製作した作品であると見なしておくことにしたいと思います。

即ち、人としては、三者、偶像製作者、呪術依頼人＝信者、シャーマン＝呪者の三者の関係のなかに「ヤマネコ土偶」は存在していると見て、以下、考察していきたい。

1. 黒駒土偶はオオヤマネコ Lynx を模したものである

黒駒土偶がヒトではなく、動物を模したものであることは、発見当初より一貫していると言ってよいでしょう。「黒駒土偶発見百年」を記念して催された釈迦堂遺跡博物館企画展『峡東の土偶』（2016.3）の調べによれば、以下のごとくです。

◆安藤正次：黒駒土偶は「人間よりは寧ろ他の動物を聯想せしむるべく、拝物的思想により人間以上のある物を表的せむとしたる当時の民族心理を推測せしむるものなり」（『考古学雑誌』第8巻第12号、1918年）

◆後藤守一：「一種の動物崇拜を語る遺物たるべし」（『考古図集』第30集、1923）

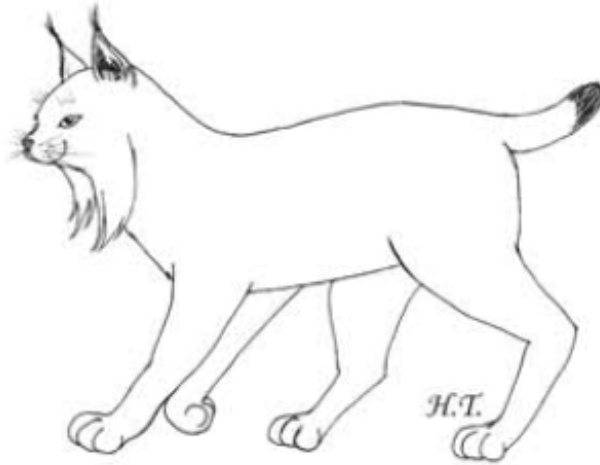
◆谷川磐雄：「人間を模したものは思われない」（『考古学雑誌』第13巻第5号、1923年1月）

◆中谷治次郎：「顔面部怪奇、四肢あるもの」（『日本石器時代提要』1929）

これら初期の見立てでは、人間ではなく、慎重に動物を模したものとされていますが、動物を明確にオオヤマネコだと見立てたのは、土偶研究の権威と目されている江坂輝弥（1919-2015）です。

「眼は猫の眼のごとく、眼尻が細く逆ハの字形に釣り上がっている。口は鼻下に裂けている。右頬には上下に向いたくさび形の細く深い沈線文があり、左顔面は眼のまわりに楕円形の沈線、その下に左頬にのびた三叉状の一条の沈線、口唇中央から下顎へ下る一条の垂線などが施文されている。これは入墨を示すものであろうか。いや、これは人の顔面ではなく、当時まだ日本列島に山岳地域に生存していた、最も獐猛で動作が敏捷なオオヤマネコに、縄文人が人以上の霊力を

図2 黒駒土偶（高さ 25.4cm、縄文時代中期）



（資料）「日本における後期更新世～前期完新世産の Lynx について」

感じ、これを神の姿に写しとって、土偶の顔面の表現に利用したものかもしれない。オオヤマネコは大型の犬ぐらいの大きさで、数は多くはないが縄文時代の草創期から晩期にいたる各地の遺跡から骨が発見されている」（『日本の土偶』 pp.82-83、2018.1、講談社学術文庫）。

オオヤマネコが縄文時代の草創期から晩期にいたる各地の遺跡から骨が発見されているという事実については、以下の論文があります。長谷川善和（群馬県立自然史博物館）、金子浩昌（東京国立博物館）、橘麻紀乃（大阪市立自然史博物館）、田中源吾（群馬県立自然史博物館）「日本における後期更新世～前期完新世産のオオヤマネコ Lynx について」（群馬県立自然史博物館研究報告（15）：43－80,2011 43）。論文要旨を以下に転用します。

「日本各地の縄文時代草創期より晩期までの遺跡よりオオヤマネコの遺物が断片的であるがかなり発掘されている。このことは一般によく知られていないので本稿でまとめた。また、若干の未報告の標本についても記録した。縄文時代の遺物の中には顎骨や犬歯に穿孔したものがある。オオヤマネコは明らかに縄文人の狩猟対象動物であった。また、考古学的遺物でない標本についても検討し、日本にオオヤマネコが渡来した時期について考察した。Lynx はユーラシア大陸におけるマンモス動物群の一要素として最終氷河期の頃へラジカやトナカイなどと共におそらく北海道経由で日本列島に渡来したと考えられる。」

オオヤマネコは日本の歴史時代には生息していなかったという説もあるし、生息していたという説もある（中村禎里『日本動物民族誌』 p.86、1987.2、海鳴社）。しかし、上記論文によって、オオヤマネコ Lynx が縄文時代に日本に存在したことが証明されたと見られます。

ただし、縄文人がオオヤマネコに霊力を感じ、ここに神の姿に写しとって、土偶の顔面の表現に利用したというのは、また別の問題です。神の姿云々は想像の域のことですから、江坂輝弥も「かもしれない」と逃げを打っています。「かもしれない」に踏み込むにはオオヤマネコの生態を知る必要があります。

平凡社「世界大百科事典」（2005 改訂版）第4巻「オオヤマネコ 大山猫 Lynx Felis linx」を引いてみます（今泉吉典執筆）。

身体の特徴は――

「尾が短く、耳の先に長生のある中型の食肉目ネコ科の哺乳類。ユーラシアと北アメリカの亜寒帯林に分布する。体長 85～75cm、肩高 50～75cm。積雪地に適応して四肢が長く、足底

が大きく、パット（蹠球）の間と足の縁には毛を密生する。頭はまるく、ほおに長毛が生え、耳介の先端には長さ4cmの黒毛の房がある。尾は短く端は黒色。体毛は軟らかく黄灰色ないし赤褐色で、ふつう四肢と腰に暗色の斑点がある。」

生態の特徴は――

「森林とその周辺に低木林に単独でテリトリーを設けてすむ。テリトリーの広さは獲物の量に応じて1000haから1万haまで変化する。この中には休息所と通路があり、テリトリーの印として役だつ。休息所は樹洞、倒木の下、岩の裂け目などで、日中と夜はここで眠り、早朝と夕刻活動する。主食は地域により異なり、カナダではユキウサギで、ウサギの数の増減に応じて約10年を周期に生息数が大きく変動することが知られている。しかし、北ヨーロッパでは主食はノロ（シカの仲間）である。そのほか、イノシシの子、リス、ネズミ、鳥なども食べる。」

オオヤマネコが、ウサギ、シカ、イノシシ、リス、ネズミ、鳥を食うなら、ヒトも食ったであろう。森林に住み、大きさが人の半分もあって、獯猛・敏捷で、肉食、早朝と夕刻活動するという特徴からすると、オオヤマネコは縄文人にとって、早朝と夕刻、襲われるかも知れない恐怖心を喚起させる存在であったでしょう。縄文人は、朝と夕、森に分け入る時は、何よりオオヤマネコを警戒せよ、を行動指針としたに違いない。

ところが、このヒトを襲うオオヤマネコに、恐怖心ではなく、逆にそこに霊力を感じとり、神のごとき霊力を見たものがいたのです。それは一般縄文人ではなく、呪術専門家としてのシャーマンに他なりません。

シャーマンとは何者か？

堀一郎『日本のシャーマニズム』（1971、講談社新書）の定義では――

「シャーマン（巫覡 ふげき）というエクスタシー（脱魂・忘我）技術を身につけた特殊な呪術宗教者を中心に、これをとりまく信者群によって形成される宗教現象であり、呪術的であるとともに、多分に神秘主義的で、かつ密教的な性格をもつもの」。(p.30、傍線引用者)

また、佐々木宏幹『シャーマニズム』（1980、中公新書）が説く、シャーマンの特質によると――

- ①神や精霊との直接接触からその力能をうる。
- ②神や精霊との直接交通（交流）によって役割を果たす。
- ③シャーマンの精神・心理状態その力能を行使している間は、常とは異なる精神状態にある。(p.26、傍線引用者)

己の才覚一つを頼りとするシャーマンは、それでは、何故に、一般縄文人とは逆に、オオヤマネコに恐怖心ではなく霊力を感じとったのか？

例えば、以下のようなシチュエーションが想定できるのではないのでしょうか？

- ◆シャーマンは人々が戦慄し、恐怖に脅えるオオヤマネコに、霊力を感じとった。
- ◆シャーマンは何とかオオヤマネコの霊力をあやかろうとした。
- ◆シャーマンはオオヤマネコに仮装すべく、オオヤマネコの仮面をつくらせた。
- ◆シャーマンは、オオヤマネコの仮面を被り、オオヤマネコの動作・鳴き声を真似、オオヤマネコのパフォーマンスを模して、オオヤマネコの霊力にあやかろうとした。
- ◆シャーマンにオオヤマネコの霊力が顕現し、その効用を呪術依頼人としての縄文人に分かち与えんとした。

詰まるところ、縄文中期中葉のシャーマンは、オオヤマネコの習性を真似ることによって、オオヤマネコの霊力を得ようとした、と考えられます。

これは、J.G.フレーザー『金枝篇』（吉岡晶子訳、2011、講談社学術文庫）の共感呪術（共

感の法則)に当たります。共感呪術には、2つあって、1つは類感呪術(類似の法則)、もう1つは感染呪術(接触の法則)です。

類感呪術(類似の法則)は、似たものは似たものを生み出す、言い換えれば、結果はその原因に似る。どんな事象でもそれを真似るだけで思いどおりの結果を生み出すことができると考える。ヤマネコの姿形や行動を真似すればヤマネコの霊力を得られるわけです。

感染呪術(接触の法則)の方は、誰かの身体とかつて接触していたものに対して加えられた行為は、その接触していたものが、その人物の身体の一部であったにせよ、そうでなかったにせよ、その行為と全く同じ結果をその人物にもたらすと考える。例えば、憎い相手に見立てた藁人形に釘を打ち込む呪いの「丑の刻参り」が典型です。

「呪術というのは人を導いて惑わす行為であると同時に、自然の法則の体系に見せかけたものなのである。未熟な技術であり、まやかしの科学なのだ」と、フレーザーは喝破していますが、縄文中期中葉のシャーマンがオオヤマネコから学び取った呪術は、似たりよったりで、まやかしの科学そのものだったでしょう。

「日本人は臍の緒を大切にしておいて、死んだときに、遺骸とともに墓に埋める」(p.107)という「迷信」が紹介されていますが、私の臍の緒は脱脂綿にくるまれて桐の箱に納められていましたから、縄文中期中葉のシャーマンに親近感を覚えずにはおれません。

一般縄文人にとってシャーマンとは何であったかについては、シャーマニズムの古典であるドジルジュ・バンザロフ(1822頃-1855)の蒙古人全般、特にブリヤートのシャーマン僧の観察から類推可能です。「シャーマンは司祭であり、医師であり、魔術師であり、占術者である。」

①祭祀としての彼は神意を体して、神は人間に対して何を要求してゐるかを決定し、儀式や祈祷の専門家として神に犠牲を捧げることを司る。

②医師としてのシャーマンは病人の体内から悪魔を追い払うために一定の方法を執る。この際手品をやり、狂乱状態を演ずる。

③シャーマン僧の本質は病気の加治や占術を行う際に特に特に強く現はれる魔術の中に在るのである。

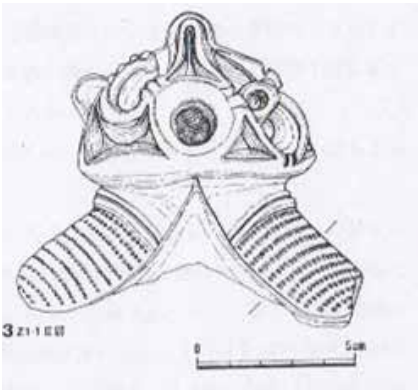
ブリヤート人がシャーマンに助けを求めることの最も多い場合は2つあって、一つは家族の誰かが病気に罹った場合、もう一つは馬が紛失した場合だそうです(『シャーマニズムの研究』白鳥庫吉訳、pp.132-134、1940.9、文求堂書店)。ここから、シャーマンの主要任務は病氣療養にあって、シャーマンはシャーマン・ドクターであったと仮に見なすことができるでしょう。

2. ヤマネコ土偶と町田市藤の台遺跡出土の顔面把手

「ヤマネコ土偶」は、ヤマネコのような表の顔が特異ですが、裏から見たバックスタイルも奇妙奇天烈です。上部は、台形で後頭部に真丸い空洞がポッカーリ、頸から両肩は八の字に垂れた大きな錘(おもり)が頭を支えていると先に見ましたが、実はこれと同じような構造の塑像が、私の住んでいる町田市藤の台遺跡から発掘されていたのです。図3にその顔面把手の実測図と「ヤマネコ土偶」の図を対照的に並べてみます。

藤の台遺跡は境川沿いの忠生遺跡とは川筋を異にしていますが(鶴川沿い)、両者は直線で2kmほどの指呼の間にあり、山梨の鋳物師屋遺跡と同じく縄文時代中期中葉の遺跡です。顔面把手とは、土器の口縁部につけられた人面を形どった把手(とつて)のことです。その造形が土偶として形作られることも多々あり、忠生遺跡からも藤の台遺跡とは異なった顔面把手が出土しています。何処かあどけなさが残る少女のような初々しさが漂い、顔の形はハート型、目はアーモンド型、鼻はブタ鼻、口はおちょぼ口といった共通した特徴があります。

図3 町田市藤の台遺跡出土の顔面把手（中期中葉）と「ヤマネコ土偶」



顔面把手実測図



参考：ヤマネコ土偶

町田市藤の台遺跡出土の顔面把手

「頭部左側に破損があり顔面と耳の一部が損なわれている他は保存状態がよい。中空で口縁部からきれいに分離した状態を示している。

大きさは肩幅 10.8cm、高さ 10cm、厚さ（鼻頂部から後頭部まで）6.6cm を測る。顔面は若干上向きで細かいへら状態工具の刺突により鼻孔を表現している。目は柿の実形で切れ長につりあがり、両耳同様貫通している。口は先端の尖った棒状工具により約 7cm の深さで刺突されている。頭部は頂部と右耳上部に丸く挟りを施した円形状の突起が配され、そこから隆帯が発し、指頭大の孔が貫通する後頭部で束ねられる。頸部以下は頭部と明確に区別され、頭下部から円筒状の肩が左右に張り出し、頭部との付根近くに隆帯が前後にめぐり、沈線が 1 条施される。また正面には張り出しの沿って左側が 2 条、右側が 1 条、他は前後に非常に細い竹管による刺突文が連続して施されている。

全体は赤褐色を呈し、胎土には金雲母と砂粒を含んでいるが表面はよく調整され、焼成は比較的堅緻である。

全体の構成・顔面各部の造作はしっかりしており、均整のとれた顔付をしていることから時期的には顔面把手の盛行した勝坂Ⅲ期（井戸尻期）の所産としてよいであろう。顔面把手は土器内側を向くように取り付けられている場合が圧倒的に多いようである。本例は取り付けられた土器本体は出土していないが、逆さにして見ると口唇部との接触面両端が若干内側（顔面側）を向いており、また真横から見ると接触面が顔面側から後頭部側に下がっている。従って本例も顔面が土器内側を覗き込むように、ややうつむいて取り付けられていたことが分かる。」

「本例が土器本体と分離して出土したのは通常のあり方として捉えられるが、同時期の土器片が周辺からまったく出土していない点は注意される。」



顔面把手の出土状況

（資料）藤の台遺跡調査会『藤の台遺跡Ⅱ』pp.73-74（1980.3）

図4 山梨県実原A遺跡、桂野遺跡、及び東原B遺跡出土の人面装飾（中期中葉）



（資料）田中清文『仮面の土偶』 p.131、2015.12、ほおずき出版

図3で藤の台人面把手とヤマネコ土偶を、正面図と後背図に分けて比較してみると、よく似ているところがあります。

①まず下の後背図から——ともに (a) 兜のような台形状の後頭部がある。(b) 後頭部中央に、真ん丸い空洞が奥深くまで開いている。(c) 頸から両肩にかけて八の字形をした大きな錘（おもり）のようなものが垂れている。(d) 錘（おもり）の表面には、ともに小孔が密生しているかのごときで、ポツポツが横縞状についている。(d) 八の字形大きな錘（おもり）は、剣道のお面の防具＝面垂（めんだれ）、或いは以下の田中清文のコトバを借りれば兜鉢の下につける鞆（しころ）が頸筋を隠し防禦しているのではないのかと思われる。

②次に正面図から—— (a) 藤の台顔面把手の頸筋には、頸から両肩にかけて八の字形の大きな錘（おもり）が垂れている。錘（おもり）の表面半分には後背図から続くポツポツが記されている。(b) しかし、ヤマネコ土偶には、この面垂（めんだれ）あるいは鞆（しころ）は見当たらず、首、肩は素肌を晒している。ヤマネコ土偶の方は、ヤマネコを造形する都合上、面垂（めんだれ）あるいは鞆（しころ）は省略しているのではないのかと思われる。(c) 藤の台顔面把手の顔型の上半分、鼻から両目尻に至る線とヤマネコ土偶の同部分の線とが似ている。

①と②の特徴が見られるのは、実は藤の台・顔面把手だけではない。田中清文『仮面の土偶』（2015.12、ほおずき出版）によると、山梨県実原A遺跡、桂野遺跡、及び東原B遺跡出土の人面装飾にもあるという（図4）。とりわけ山梨県実原A遺跡は藤の台遺跡のものはそっくり。田中清文は、この八の字に垂れた大きな錘（おもり）を、頭部と肩との間を装う一種の装具と見な

し、これを「シコロ状装具」（戦国時代に武将が着帽した兜鉢の下の首筋に付けた「鞆」〔しころ〕と名付けています。

こうした人面把手とヤマネコ土偶との相似をどう見たらいいのか？

①まず、制作段階で、一方を、もう片一方が真似たのだと考えられます（仮に藤の台人面把手をヤマネコ土偶を真似たと仮定しましょう）。真似たのでなかったら、同一のつくり手、ないし同一の制作工房のものというケースもあり得ます。同地域、同時期で類似した作品が作られるのはザラにあり得ることです。両者の制作様式が共通しているのは、また、土偶に転用されることが多い人面把手とヤマネコ土偶とが、同じく（広い意味で）土偶であることを示しているでしょう。

②藤の台顔面把手は、背後から見ると兜のような台形状をしているところから、被り物と見られます。兜から両肩に垂れ下がる八の字型の錘は、兜の重みを両肩で受け止めて、兜を安定化させる装置ではないのか。

③藤の台顔面把手、ヤマネコ土偶ともに末広がりになっていること、また相当な厚みがありそうなことから、この材質は硬質なものではなく軟質なものではないか。八の字型錘の表面の規則的なポツポツの横縞からの類推としては、材質は獣皮・毛皮ではないのか？ 獣皮・毛皮とすればヤマネコのものの可能性が高い。

④藤の台顔面把手の顔は、ハート型、目はアーモンド型、鼻はブタ鼻、口はおちょぼ口といった顔面把手共通の顔のつくりから見て、仮面であろう。仮面をかぶるのはシャーマンであり、この仮面の下にはシャーマンの素顔があるはずで、ヤマネコ土偶の方もヤマネコの仮面に相違なく、ヤマネコ仮面の下にも、シャーマンの素顔があるでしょう。

⑤藤の台顔面把手の額とヤマネコ土偶の額との形がよく似ている。ヤマネコ土偶の額は頭の線と眉とで作り出す银杏葉の形をしているが、これは藤の台顔面把手の額の形と同じと見なせる。これは三日月の模写だといわれていますが、ここではスペースの都合で詳論は避けます（ネリー・ナウマン『生きの緒』pp.193-196、『富士見町史上巻』pp.418-422）

⑥裏（後ろ）から見ると、両者ともに真丸い穴が開いているが、穴の中は共に空洞らしい。この穴は、人にも動物にもないもので、中空土偶制作時の空気抜きではないのか？ ヤマネコ土偶は頭の中央部も、逆V字型の粘土紐があるばかりでカラッポですが、これは、鑄物師屋遺跡出土の「子宝の女神 ラヴィ」の頭のつくり、よく似ています。

さて、以上のようにヤマネコ土偶を藤の台顔面把手と比較してみると、ヤマネコ土偶が仮面土偶であることがはっきりします。仮面といっても、シャーマンの顔の前面にヤマネコの顔をした面を貼り付けたものではない。獅子舞の獅子頭（かしら）のごとくに、ヤマネコの顔・頭をした被り物を、シャーマンの顔・頭にすっぽり被せるといった構造をした仮面です。

シャーマンが、ヤマネコ頭を被ると首筋がむき出しで不安定きわまりない。そこで、そこに藤の台顔面把手のような、頸から両肩にかけて八の字形の大きな錘（おもり）、面垂（めんだれ）あるいは鞆（しころ）が、あてがったのではなかろうか。この面垂（めんだれ）・鞆（しころ）は、獣皮・毛皮製と推測され、ヤマネコ土偶の場合は実際にヤマネコ皮が使用されたことでしょう。

ヤマネコ土偶の胸から下、背中から下は、それぞれシャーマンの体を模していると思われまます。乳房がないのは、このシャーマンが女ではなく男であることを表しています。むろん土偶に一般的な正中線もないが、かわって背中にはますます下降する背骨の線があります。最下端緒のウエストは極度にすぼまっていて、この下の造形はむつかしいのではなないか。

ここでヤマネコ土偶のシャーマンが女ではなく男だということは、重大な問題を提起しています。藤の台顔面把手は明らかに女で、「女性は小呪術を得意とする。小呪術（占い、妖術、民間療法など）に限定される。シャーマニズムの根本的経験——すなわち、天界上昇と冥界下降——

は、ほとんど男だけの独占物になっている。これらの事実すべては、原初の呪術が女性によって発見されたという仮説を否定すると思われ、ある期間中、女性の霊的技術を定まらぬものとする。」(『エリアーデ著作集 13』「未開民族における純潔・性・神秘性」p.34)。

女のシャーマンと男のシャーマンとの分業という、この問題は極めて奥深い問題を秘めていますので、ここでは問題の指摘だけに留めておきたいと思います。

注1：ネリー・ナウマンのヤマネコ土偶観察

ネリー・ナウマン、檜枝陽一郎訳『生きの緒 縄文時代の物質・精神文化』(2005.3、言叢社)がヤマネコ土偶(上黒駒土偶)を観察していて、重要な指摘をしている。「三本指」については、後に別途言及するが、両眼と顔の造形について彼女は以下のように言っている。

両眼について――

「正面から見ると、左目の溝はほとんど閉じているようだ。しかし、側面から見ると、光の反射のせいで逆の印象さえ受けるかもしれない。しかしながら、左目の周囲には卵型をした刻線があり、右目とは大きくちがう。一方を閉じて他方を開いた目をつくる意図があったかもしれない。ただそれははっきりしない。楕円形の刺突列が三本右目から短く下がり、涙を示している。左目の目頭からは刻線がまっすぐ顔の外縁へ伸びている。」(p.184)

額の三日月形の窪み(銀杏葉形)について――

「額にはもうひとつ奇妙な特性がある。眉と顔の輪郭線で囲まれた額が、三日月形の窪みで表されていることである。若干の土偶や、眉や額の輪郭線をつくる隆帯が刻線で縁取られている。」(p.193)

顔の造形について――

「上黒駒遺跡出土の土偶にある奇蹟は、光と闇(異なる両眼)、交錯と復活(三日月の額)、流れる水(右目から滴たる涙)を表している。右頬の風変りな文様は、われわれも理解を越えており、左目から外に向かう線も同様である。「猫」顔だと言われるのは、独特の形をした口にちがいない。しかし縄文時代の日本には、造形表現に使えるような猫はいなかった。兎唇[みつくち]だと考えることもできる。ただ口から顎へと伸びる縦線とともに、口は十字形をつくり、口から顎へと伸びる縦線とともに、口は十字形をつくり、口の右端に結ばれた曲線は、他の土偶にもある「記号」の一つのようである――これ以上の発言は無益であろう。」(pp.198-199)

無益なことながら、兎唇[みつくち]は、兎の唇だが、猫の唇も、みつくち状態を呈しているように見える。

3. エリアーデによるシャーマンと動物の関係

先に私は、ヤマネコ土偶は、シャーマンがオオヤマネコの霊力をあやかろうとして、オオヤマネコの仮面を被り、オオヤマネコの動作・鳴き声を真似て、オオヤマネコのパフォーマンスを演じた――即ち、類感呪術を行ったのではないかと仮定しました。フレイザーが断ずるように、現代人のにとっては、「呪術というのは人を導いて惑わす行為であると同時に、自然の法則の体系に見せかけたもの」「未熟な技術であり、まやかしの科学」だとしても、今考えているのは、縄文中期中葉の縄文人にとって、どうであったかです。縄文人にとって呪術は、「未熟な技術であり、まやかしの科学」であろうはずがない。困ったときの神頼みでもある。縄文人一般にとっては、呪術おそらく自然の法則にのっとった信じられる考えで、成熟した技術であり、真実の科学として映っていたのではないのでしょうか。

大著『シャーマニズム――古代的エクスタシー技術』(1968、堀一郎訳)でミルチャ・エリアー

デは、シャーマンと神々・精霊との関係について語っています。

「シャーマンとは神々や精霊と直接的かつ具体的な体験を持つ人々のことである。シャーマンはこうした神々や精霊を目のあたりに見、彼らと語り、彼らに祈り、彼らに懇願する——だが彼はある限られた数以上、神々や精霊を「統御」することはない。だから、シャーマンが神がかって祈るどの神も、どの精霊も、祈られるということによってシャーマンの「親近霊」や「救助霊」になるのではない。」

そして、次のようにシャーマンと動物との関係に言い及んでいます。

「われわれはこうした親近霊や補助霊の大部分が、動物の形をとることに注目しなければならない。こうした霊は、熊、狼、雄鹿、野兎、あらゆる酒類の鳥（とくに駝鳥、鷺、梟、烏など）、大蛆などの形で現れ、同時に幽霊、森の精、大地の霊、炉の霊などとしても現れる。」(p.110)

ヤマネコや蛇も、親近霊や補助霊として現れることは自明のことです。これらの補助霊を獲得するために、シャーマンは、その動物に変身しようとするのです。そして、変身は動物の仮面をかぶることによってなされると言います。否、仮面によって変身するだけでは不十分です。シャーマンは、その動物の行動を真似し、鳴き声、つまりはその動物の言葉、言語を真似し、その動物語を学び話すのです。

「シャーマンの巫儀を見学することに成功した旅行家や民俗学者は、トランスを準備する過程でシャーマンが見せる奇妙な行動に驚かされた。彼らは、シャーマンが種々の動物の鳴き声と行動を真似ようとしていることに格別の注意を払った。また彼らは、そのような動物の模倣が、リフレイン、裏声、擬声語を伴うこと、そしてしばしば専門家によってシャーマンの「秘密の言語」と名づけられた、ある理解し難い言語に属する語さえも伴っていることに注目した。これらの諸事実は、シャーマニズム的世界の至るところで観察されている。実際に動物の行動や鳴き声の模倣は、エクスタシーを準備する行為の典型を成している。」(『エリアーデ著作集 13』「エクスタシー技術と秘密の言語」 p.44)

例えばバクサによる報告——犬のように吠え、参会者の臭いを嗅ぎ、牛のように吠え、羊のように唸り、叫び、メーメー諦く。また、豚のようにブーブー言い、ヒヒンと言ったり、クークー言ったり、驚くべき正確さで動物の啼き声や、鳥のさえずりや、その飛ぶ様子を真似し、そのすべてが聴衆に深い感銘を与える。

「蛇を補助霊とするトゥングースのシャーマンは、巫儀の間爬虫類の運動を真似て演じようとする。」(同 p.46) 頭に蛇を載せた土偶は、中期中葉の土偶として一般的であり、「縄文のビーナス」の頭上のターバンごとき被り物の中にはマムシが蝮局を巻いています（第6回論考参照）。マムシの鳴き声は知りませんが、舌をチロチロ出しシュシューと音立てくねる。頭上の蛇は古代エジプトをはじめ古今東西インターナショナルな呪物で、シャーマンがマムシの霊力にあやかろうとしたものであると見て間違いない。

ヤマネコ土偶の発する啼き声は、動物園にいるのを聞いてみると、豹か猫のごとくで荒々しくニャオーと聞こえます。発している声は、ヒトとしてのシャーマンではなく、精霊あるいは神の声ということになりましょう。

「動物というものは未開人の目には無視できぬ威信を備えている。実際動物は生と自然の秘密を知っており、不死と長寿の秘密すら知っている。」(同 p.51)

シャーマンと動物との関係を、エリアーデは、以下のように総括しています。

「巫儀の間に動物の声をまねること、この秘密語を用いることはまた、シャーマンが三つの宇宙圏——地下界、地上界、天界——を通して自由に動き得ることのもう一つのしるしである。このことはシャーマンが、死者や神々しか近づくことのできぬ所に安全に出かけて行けるということに他ならない。巫儀のときに動物を体現するのは、死者に関して見たように、シャーマンが動

物に呪的変身をするのよりも劣った憑依である。同じような変身はその他の——例えばシャーマンの衣裳を付けること、仮面で顔を隠すこと——によっても達成される。

しかし、これがすべてではない。多くの伝承において、動物との親交や動物の言葉を理解する例のあることは、楽園的徴を示している。初めるとき、すなわち神話時代には、人々は動物と平和に暮らし、動物の言葉を解した。聖書の伝承の「人間の墮落」に比すべき原初的破局の時までは——人間がこんにちそうであるように、死ぬべきものとなり、性をもつようになり、自らを養うべく働かねばならなくなり、動物と敵対関係に入るまでは——、そうではなかったのである。エクスタシーの準備中、あるいはエクスタシーの間、シャーマンは現在の人間の状態を止めて、エクスタシーの続く間だけは太初の時にあった状態を回復する。動物との親交、その言葉の理解、動物への変身といった事柄は、時の曙において失われた「楽園のような」状態を、シャーマンが再建したことのしるしなのである。」(『シャーマニズム』 pp.117-118)

4. ヤマネコ土偶の「三本指」は呪術成就のVサイン

ところで、ヤマネコ土偶の胸にかざされている左手の三本指は何を意味しているのか？ 三本指は、中空土偶「ラヴィ」などの他に、長野県藤内遺跡出土の有孔鏝付樽など縄文中期中葉の土器に見られるもので、必ずしも珍しいものではない。胸の前に、これ見よがしに三本指を誇示していることからすると、三という数字には、特別な意味が籠っているであろう。

ライプルク大学の日本学教授であったネリー・ナウマン(1922-2000)は、三は月が死んで他界に宿る三日間を意味していると断じています。

「三」が陰暦では重要な数であることは承知されている。月が死んで他界に宿る三日間というのが決定的であったに違いない。この三日間を過ぎてから、月は再生と若返りを果たしたのちに、ふたたび闇から出現する。三本指の手は、三日間の闇夜を表すと思われ、その後に新月が新たな生に向け姿を現す。それは、旧世界や環太平洋地域および先コロンブス期のアメリカのあらゆる場所にみられる象徴である。早くもヘンツェ〔1883-1975〕が指摘していたように、こうした地域の事例は容易に増やすことができるだろう。

そうすると三本指の手というのは、月の出ない三夜という天文学的事実とそれにまつわる象徴性を、とくにそれ以外の月の象徴性と並べて指摘しているにすぎない。それは月神の特色となるかもしれない、また月にゆかりのある何らかの動物の身体の一部となるかもしれない。後者のもっとも顕著な例が蟄と蛙である。」(前掲『生きの緒』 p.201)

縄文人は太陽の変化ではなく、月の満ち欠けを見て生活していたことは間違いない。太陰暦で3日の月というのは三日月(みかづき)のことです。ゼロはまだ発見されていませんから、1日月、2日月、3日月と数えられたでしょう。

一日月は暗闇で全く見えず、朔月(さくげつ)、または朔(さく)と呼ばれています。二日月は光が辛うじて見える。太陽が沈んだあとに西の空にうっすらと浮かぶ、糸のように見えることがある細い月。秋には20分くらい、他の季節でも1時間くらいで、沈んで見えなくなってしまうので、目立たない、ほとんど見るができない。別名織月(せんげつ)。糸のように見えることがある細い月です。したがって、一般には2日目は月がでないと認識され、最初に見える月は三日月だとされます。その証拠に、2日月は、新月(しんげつ)、初月(はつづき、しょげつ、ういづき)、眉月(まゆづき)、織月(せんげつ)などとも言われます。

すると、見えない新しい月は、一日月と二日月の二日間。だが、実は、この前に29日目の三十日月=晦日月(みそかづき)があって、晦(つごもり、みそか)、英語ではdark moonと言われる月があります。この月は2日月に近く、東の空にうっすらとして、肉眼ではほとんど見

図5 三日月——新しい月に抱かれた古い月



(資料) 井戸尻考古館、田枝幹宏『八ヶ岳縄文世界再現』p.85、1988.11、新潮社

られない古い月です。すると、古い月と新しい月、三十日月、朔月、二日月を合わせ、3日間は月が見えないことになるわけです。

長野県富士見町の井戸尻考古館が撮った三日月の写真は図5のごとくです(写真=田枝幹宏)。この月を眺め、考えた小林公明(井戸尻考古館元館長)は、以下のように記しています。

「そこには、月に起因する三、すなわち三日間の闇を経て西の空に甦る新月の、その三が数えられているのではないか。明け方の東の空にいくら目を凝らしても、痩せ細った三日月は見えなくなる。いっぽう、夕方の西空をいくら探しても、新しい月は見つからない。その間、ほぼ三日。三日待てば、西の空に爪痕のような新しい月が産まれているのである。」(『富士見町史 上巻』p.381、1991.3)

小林公明の観測結果はナウマンとピシャリ符合しています。即ち、三本指は、天文学的には月の出ない三夜、①三十日月(みそかづき)、②晦(つごもり)、③織月(せんげつ)の闇夜を意味している。呪術的には、この三日の闇夜を耐え忍ぶなら、西の空に新しい月が産まれることが暗示されています。期待される呪術が仮に病気平癒であったなら、シャーマンにとって罹病して三日間は呪術治療期間が猶予されることになるでしょう。

三日間の時間的余裕があれば、たいていの病気は自然治癒するにちがいない。時間は力であり、総てを解決してくれます。自然治癒しなければ、シャーマンは、また別種の人身掌握術を繰り出すことも可能になるでしょう。オオヤマネコの仮面を被り、オオヤマネコのパフォーマンスを模して、オオヤマネコの靈力にあやかろうとした呪術が何をもたらそうとしたかは不詳ですが、オオヤマネコの仮面の「三本指」は、三日待て、言わば「待てば海路の日和あり」という呪術成就のVサインではなかったか。とりあえず、「三本指」は、シャーマンに時間的余裕を与える人心掌握パフォーマンスであったと見ておくことができるでしょう。

5. 縄文中期土器のカエルと馬王堆帛画の蝦蟇

三本指が、三日の闇夜を暗示しているにしろ、ナウマンは、最後に、「それは月神の特色となるかもしれない、また月にゆかりのある何らかの動物の身体の一部となるかもしれない。後者のもっとも顕著な例が蟄と蛙である」と謎のようなことを言って結んでいます。この「蟄蛙」とは何なのか？

これについては、小林公明が図像学という手法によって、ものの見事な謎解きを行なっています。それは、『富士見町史 上巻』（1991、富士見町）や『八ヶ岳縄文世界再現』（1988.11、トンボの本、新潮社）で詳論されていますからご覧いただくとして、ここでは、その結論部分をおおまかにトレースさせていただきます。

まず探求方法——図像学というのは、単純な論理の積み重ね学で、難しいことでもないようです。「これが元でこれとあれが似ている。これとあれは同じ。さらにあれとそれはおなじ。すると、これはそれと同じだ。という、三段論法です。あるいは、「代入」とか「置換」ですね。こういう考え方がある。ある文様の全体の構成が同じであるとき、その中の一部が違っていても、それはこちらのものと同じである。という、ものの考え方です。」(p.274) 要は三段論法を積み重ねてゆくわけで、その積み重ねを慎重に巧みにやるのが肝心かなめになります。

例えば、図6左側上、中期中葉の曾利遺跡出土の大深鉢に描かれた図像は何か？ 蛙であろう。上は前肢、下は後肢、左右前肢の下の◎◎は蛙の目玉だと思われる。すると、図7の藤内遺跡出土の有孔罽付樽に描かれた図像も、蛙を描いたものと察しが付く。中央上に突き出た二つの環(双環突起)は目玉であろう。バンザイした両腕の先にはそれぞれ3本指が見える。この3本指が蛙のものであることが、図8(久兵衛尾根出土の土器片)によって確認できます。

さらに、探求はインターナショナルに、古代中国に及んでいます(図9)。

「古代中国における最初の蛙文は、黄河中流域、仰韶(ぎょうしょう)文化の彩陶(彩色された土器)に現れる。仰韶文化は、半波類型(およそ紀元前5000～4000年)と廟底溝類型(前4000～3000年)に分けられる。前者に属する姜寨遺跡出土の蛙文は、魚文とともに盆の内側に黒彩されている。背中一面に斑点がしるされているので、ヒキガエルだと判断される。肢趾の指は三本だ。一対ずつの蛙と魚文の組み合わせは、はじめに見た曾利の例とよく似ている。……後者に属する廟底溝遺跡出土の蛙文は、口のすばまった小型な盆の器腹に描かれている。テントウムシみたいな円い斑点があるから、ダルマガエルの類であろう。指は三本。背中は二分されている。上ノ入や水上、藤内などの例と同様だ。」(『富士見町史 上巻』pp.373-374)

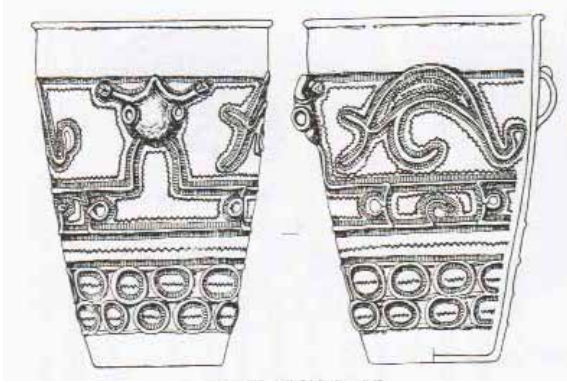
ともに土器にカエルの背と三本指が描かれている。中国の仰韶文化は、縄文中期中葉と同時代ですから、中期中葉の蛙を描いた文様の原型は中国から伝わったものと見ざるを得ない。

ことは仰韶文化だけに止まらない。仰韶文化に続く馬家窯(まかよう)文化では、華麗な彩陶に双環突起、擬人化された蛙文などが描かれている。また、殷周王朝(紀元前17、16世紀～11世紀半ば)の青銅器の盤(ばん)と呼ばれる器には、亀や鼈(べつ、すっぽん)と蛙の合いの子が描かれている。図像学の三段論法が、あれも、これもと積み重ねられています。

そして、小林公明の探求は、湖南省長沙市馬王堆の帛画(絹に描いた絵)の三日月と蟄(蛙)と兎に、行き着いています。時代は前漢(紀元前206～紀元25年)、ざっとキリスト生誕の頃です。私は、1986年にこの遺跡を訪れたことがあり、生けるがごとき貴婦人のミイラに仰天したのですが、帛画も豪華絢爛、鮮烈でした(図10)。

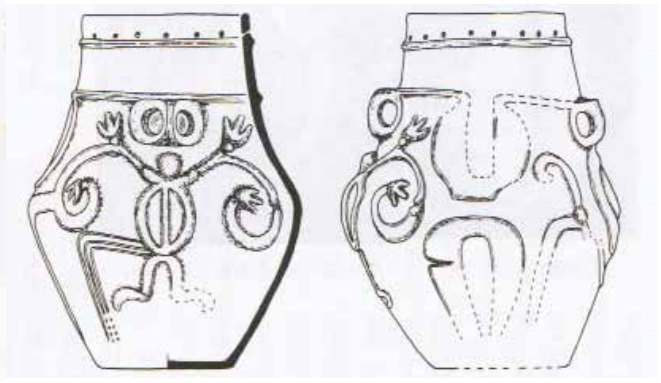
帛画は葬礼の際に人が棺の前に掲げて歩いた「銘旗」(死者の官位や姓名を記した葬礼用の旗)で、埋葬する時には棺を覆い、それによって魂を昇天させる招魂旗であつたらしい。帛画は上か

図6 曾利遺跡出土の大深鉢



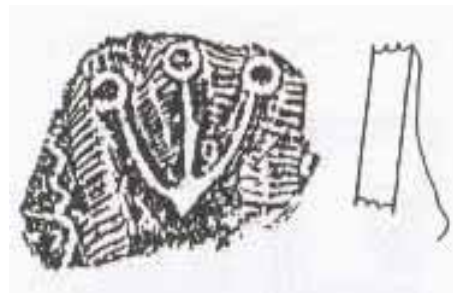
(資料)『富士見町史 上巻』p.367

図7 藤内遺跡出土の有孔罎付樽



(資料)『富士見町史 上巻』p.370

図8 久兵衛尾根出土の土器片



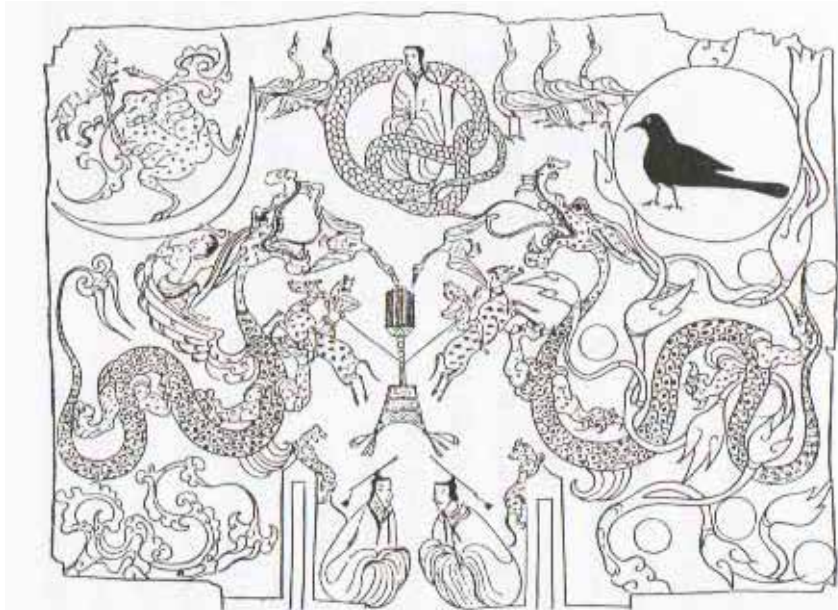
(資料)『富士見町史 上巻』p.368

図9 仰韶文化の蛙文



(資料)『富士見町史 上巻』p.373

図10 長沙市馬王堆の帛画（左端が三日月・蝦蟇・兎）



(資料)『人民中国』

http://www.peoplechina.com.cn/home/cond/2010-12/21/content_320281.htm



図11 月桂鑑（唐時代）



(資料) 楠山春樹『新釈漢文大系 第54巻 淮南子(上)』口絵、1979.8、明治書院

「姮娥と蟾蜍のほか、中央に桂樹があり、その下で兎が仙薬を搗いている姿が見える。月中に兎が住むという所伝は、早く『楚辞』天文にあるが、その兎が仙薬を搗いているとすることは、晋の傅玄の作という「擬天問」あたりが初出らしい。おそらく頭初は、月の陰影を空想して、或いは蟾蜍といい、或いは兎と称したのであるが、その後姮娥奔月の物語が流行するようになって、その兎が薬搗をさせるようになったのではなからうか。」「わが国で行われている兎の餅搗き伝説が、薬搗(くすりつ)きの物語の訛伝であることはいまどもなかろう。」(『新釈漢文大系 第54巻 淮南子(上)』p.319)

[左図は原典は、欧米兎儲支那古銅精華 鏡鑑部]

ら下に三つの段に分かれていて、それぞれ天上、現世、地下の世界を象徴している、天上の部分は右上の角に一輪の赤い太陽があり、太陽の中に足が三本あるカラスが描かれている。そして、左上の角には、眉のように細い三日月が輝き、そこには蛙(蟾蜍 せんじょ、蝦蟇 がま、ヒキガエル)がうずくまっていたり、左上を見ると、兎も跳ねている。

中国天文学の研究家で京都大学総長を務めた新城新蔵(1873-1938)によれば、三本足のカラスは太陽の黒点です。「楚辞天文篇」に、黒点を鳥に見立て「日は陽の精なり、三は陽の数なり、故に日中三足の鳥あり」などと説く。「黒点は現代天文学の中心問題であるが、黒点を三足の鳥に見立てたる戦国秦漢の人士は其精神に於ては二千余年前に早く既に現代天文学の先駆をなして居ると言ふべきである。」(『こよみと天文』pp.51-53、1928、弘文堂書房)。

兎と蝦蟇とカエルの実像は月のクレーターです。小林公明は神話考証しています。

蟾蜍、ヒキガエルについては、紀元前2世紀末の『淮南子(えなんじ)』が、太陽を射落とし

図12 承露盤(左)と乾隆帝の立てた銅仙承露盤(右)



(資料) 文学城 熱点討論

た弓の名手・羿(げい)が西王母からもらった不老不死の薬を、その妻・姮娥(こうが)が盗んで月へ逃げたと伝えていて、『後漢書』には月で姮娥が蟾蜍に化したとある。また、漢代の『元命苞』には「月が何のためにかかるかという、月の中にヒキガエルと兎、つまり陰と陽が両方そなわっていて、陽が陰を制し、陰が陽をよるべとしているからである」。言い換えると、ヒキガエルは陰気の象徴であり、その陰気が蓄積すると、次第に月が満ちてゆき、逆に陽気が立ち現れて、兎が徐々に姿をあらわすことになる。

「では、陰が陽をよるべとするとは、どういうことだろう。それは現実には、三日月の頃の夕方、古い月が青っぽく澄んで、あたかも新月に抱かれたようにしている、その様をいうのではないだろうか。西洋ではこれを「新しい月に抱かれた古い月」(The old moon in the arm of the new moon)という言葉であらわす。そうすると、陰であるひきがえるは、光らない古い月をあらわすことになる。しかしそれは、死せる月であると同時に甦らんとする月でもあるから、不死の薬を盗んで月に走った姮娥がひきがえるに化したとしても、不合理でない。」

小林公明のA5判20頁もの緻密な神話考証学を短くまとめるには無理があります。ここでは、途中の論証の長旅を端折り、三段論法の中途の「代入」とか「置換」を端折って短絡する愚挙を犯しています(『富士見町史 上巻』は長野県諏訪郡富士見町3597-1コミュニティプラザ。A5判上製1324頁。価5000円・送料別。電話0266-62-7900。なお本書の「第二章 新石器時代中期の民俗と文化」は小林公明以外の人には書けない傑作です。)

最初は、図7の藤内遺跡出土の有孔鏢付樽に描かれた蛙。

最後は、図10の長沙馬王堆帛画の蝦蟇。

この両者の間に様々な図像・論証が介在していますが(ここではそれらの論証材料は省略して)、両者は同じことを表していると見ます。片や三本指、もう一方は三日月。そこには、月に起因する三、すなわち三日間の闇を経て西の空に甦る新月の、その三が数えられている。月は満ちたり欠けたりする。死んだり生きたりする。死んでも三日間を経ればよみがえり、十五日を経れば満月となり蘇り、さらに三十日単位で生と死を繰り返す。人にとって最も悩ましい問題は死ですが、月は三日間を経ればよみがえり、月には死そのものが無い。そこで、神話的思考法で、縄文中期中葉の縄文人や中国の古代人にとって、月は不死のシンボルとして崇められることになったのです。図10で中央にましますのは天上世界に行き着いたミイラの主=軟侯夫人ですが、彼女は3日を経れば蘇る、ここには魂を昇天させる招魂の神話が描かれているのです。

図 13 天安門左右の華表と頂上の承露盤



(資料) フリー百科事典『ウィキペディア』

では、月の不死は何によるものなのか？ ヒキガエルの背中のイボイボ、そこにたまる水ではないのか？ 不死の水。その月の水をとって飲めば、人も甦ることができる、若がえることができる。中国では春秋戦国の時代に、「鑑」（かん）という大きな銅器で、実際に月の水を採ったそうです（図 12）。「皓皓と月が照るような晩に、この大きな銅器を屋外に出しておくと、そこに凝結した露が溜まる。これを「月の水」だというわけです。神話によれば、その水は、「不死の水」なんです。」（『甦る高原の縄文王国』小林公明講演 p.282）そうして採った月の水を水銀で覆い、太陽の精をとって中身を加熱した丹を長く服用すれば死なない。

歴代の皇帝も萬壽無窮を希求した。漢の武帝（BC156-187）は、八百歳まで長生きできると言われる、天から降る甘露を承けるために、仙人の像を鑄造し、都・長安においた。高さ約 67 メートルの台座上に銅仙人が手に持つ銅の皿、即ち承露盤を作り、月の水を求めた。盤にたまった仙露を採り、玉の粉末をまぜ、服用した。

清朝の乾隆帝（1711-1799）が建てた月の水を採る承露盤仙人は、いまでも北京・北海公園に立っています。清朝の宮廷料理で有名な「仿膳」の裏手、白塔山の中腹、龍を彫った石の円柱のうえ（図 10）。「観光客にはわかりにくい場所で、北海にむかい盤をささげて立っている後姿は、心なしか淋しげである」（竹内実『北京』pp.129-131、1992.9、文芸春秋）。

天安門前にも華表（かひょう）があります（図 13）。華表は台座、蟠龍柱（とぐろを巻く龍）、承露盤とその上の蹲獸像の 4 つで構成されていて、左右二つの華表の頂上・石柱上にあるのは、月の水を採る受け皿、承露盤に他なりません。華表は、古くから日本の鳥居の起源ではないかと言われています。

なお蛇足ながら、天安門広場には水晶の棺の中に永久保存を施されたミイラも存在しています。偉大的領袖和導師毛沢東主席永垂不朽。

6. 「竹取物語」、「万葉集」と『月と不死』

日本には承露盤はないのか？

『竹取物語』には、月の国に由来する不老不死の秘薬が登場しています。最終クライマックスで、かぐや姫は、真実を告白しています。

「実を申しますと、私はこの国の人間ではありません。月の都の者でございます。ある因縁があって、この世界に来ているのですが、今は帰らねばならぬ時になりました。この八月の十五夜に迎への人たちが来れば、お別れして私は天上に帰ります。」

そして、帝にさし上げる手紙を書いて、それに月の人々の持つて来た不死の薬一壺を添へて勅使に渡し、天の羽衣を着て、車に乗り、百人ばかりの天人に取りまかれて、空高く昇って行ったそうです。（『竹取物語・今昔物語・謠曲物語 No.33』復刻版日本児童文庫、名著普及会、1981、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)）

かぐや姫は、月の不死の薬を帝（みかど）への置き土産としたのです。しかし、帝は不死の薬を吞まず、富士の高嶺で焚かしめられ、その煙は今も雲の中へ立ち上るとき。ジョン・バッチェラー（1854-1928）によれば、フジは火（フジ・フチ）であり、アイヌは炉の火である祖母のことをフジ・フチと呼びかけ祈るそうです（『アイヌの暮らしと伝承』小松哲郎訳、pp10-11、1999.11、北海道出版企画センター）。

『竹取物語』は、平安時代前期に成立した「物語の出で来はじめのおや」（『源氏物語』）ですが、その作者が中国の月の水神話を下敷きにして書いたことは疑いない。最近の研究によれば、『竹取物語』の原型は中国にあり、四川省奥地のチベット族によく似た民話「竹姫」が伝承されているそうです（野口元大『新潮日本古典集成 竹取物語』p.96、pp.200-224、2014.10）。

日本神話における月の神、ツクヨミも、変若水信仰に関わりを持っていました。『万葉集』で「月夜見」は、若返りの霊水、「をち水」を持つ者として登場しています。巻13の歌には、こうあります。

天橋（あまはし）も長くもがも高山も高くもがも月読（つくよみ）の持てるをち水い取り来て君に奉（まつ）りて（3245）

〔天に登る梯子がな長くあればいいなあ。月の神が持っている若返りの水を取って来て、君に奉って若返りたいものだ〕

反歌

天（あめ）なるや 日月のごとく我が思へる君が日に異（け）に 老ゆらく惜しも（3246）

〔天にある月や日のように私の思っている君が、日増しに老いていくのは惜しいことだ〕

（佐竹昭広ら『萬葉集 三 新日本古典文学大系』p.238、2002.7、岩波書店）

我が手本（たもと）まかむと思はむ ますらをは をち水求め白髪生ひにたり（巻4・627）

〔私の手枕をしようと思うますらおなら、若返りの水を求めて来てください。ますらおたる者に白髪が生えますよ〕

白髪生ふる ことは思はずをち水は かにもかくにも求めてゆかむ（巻4・628）

〔白髪の生えることなど気にしません。若返りの水はともかく求め参上いたしましょう〕

月には不死の霊水があると伝えられていて、それが標準的教養となっていたことが知れます。故事にまつわる親孝行話は、古今著聞集に伝えられており、この不思議な水を飲んだので白い髪は黒くなり、顔の皺（しわ）もなくなり、すっかり若々しくなったそうです。霊亀三年（717）九月、元正天皇は美濃国不破行宮、当耆郡多度山の美泉を「病の平癒」と「若返り」の名水と称賛し、養老と改元したそうです（続日本紀・養老元年十一月十七日）（佐竹昭広ら『萬葉集 一 新日本古典文学大系』pp.379-380、2002.5、岩波書店）

平安時代に、不死の水は支配階層に知られていて当然ですが、庶民階層（常民）の間に普及した風習であったか、どうか？ それを伝えているのが、ロシアの民俗学者ネフスキー（Nikolai Aleksandrovich Nevsky, 1892-1937）によって宮古島で蒐集された、「月と不死」にまつわる民

俗です（『月と不死』岡正雄編、1971.4、平凡社東洋文庫）。

昔々の大昔のこと。お月様お天道様が、人間に長命の薬を与えようと思って、月のアガリヤザマガを使いとして使わされた。アガリヤザマガは二つの桶を担いできた、その一つには変若水が、今一つは死水が入っていて、人間には変若水を浴びせ、生き替わる事と長命をもたせよ、蛇には死に水を浴びせよ、ということであった。ところが、その途上で、アガリヤザマガが小便をしているスキに、大蛇があらわれて、変若水をジャブジャブ浴びてしまったというのです。アガリヤザマガは驚きあわてた、どうしよう、仕方がない、泣き泣き、死に水を人間に浴びせる破目になった。

コトの顛末を聞いたお天道様は大変お怒りになって、アガリヤザマガに体罰をお加えになったそうです。それがため、アガリヤザマガは今もなおお月様の中において桶を担いで立ちはだかつて罰せられているとき。

「人間はなんとといふ馬鹿者だろう！ 若し蛇の様に気早いものであったなら、変若水を浴びて生れ替へて、いつもいつも長命であられた筈なのに、死水を浴びてしまつたから死んでゆかねばならぬ様になりました。それに引返して蛇はその時から今まで終始脱皮し、生まれ替へて長生してゐるのだとさ。」

それにもかかわらず、神は人を憐み永久の生命でなくとも、多少若返りくらいはさせてやろうと、大空から若水を送ることとなった。これより今日に至るまで毎年第一日の黎明に、井戸より水を汲み、若水と呼び全家族が水浴する習慣が存しているそうです。（同上 p.13）このネフスキーの宮古島・沖縄の変若水は、若水の原型と思われます。若水（初水）とは、元旦早朝に初めて汲む水のことです。平安朝の年中行事に立春の「供若水」があり、天皇がその水を召し上がるという行事があった（新谷秀夫「月夜見の持てるち水」小考 関西学院大学『日本文藝研究』43 (1), p58-71, 1991.4）。また、平安中期の延喜式には、立春の日の明け方に水を汲み、天皇に奉る旨の記述があるそうです。宮中には若水を採る「鑑」が存在していた！

日本本土各地の多くの神社では、立春（または元日）の早朝に、若水を汲んで神に捧げています。東大寺二月堂でも、立春の「お水とり」が千年余途切れることなく続けられています（若狭井の水）。「飲むもの衆病を除く」——元を正せば民間の正月行事「おこない」が原型だそう（五來重「お水取りと民俗」『東大寺お水取り』1985.2、小学館）。

天皇との関係では、折口信夫がスルドイ考察をしています。

「すで水を呑むのは、選ばれた人だけだった。其にも係らず、人々は皆其にあやかりとした。せめて自家の井戸からでも、一掬の常世の水を吊らうと努力して来た。さうして家や村には、ともかくこんな人が充ちてゐたのだ。すで人からのあやかりものである。」（「若水の話」『折口信夫全集』第2巻 p.131、1971、中央公論社）

そればかりではありません。民俗学の石田英一郎（1903-1968）によれば、似たような神話の分布は世界各地に及んでいます。アイヌ神話、北欧神話、スウェーデン、エストニア、ドイツ、アイルランド、ヤクート族、ブリヤード、蒙古族、ゴリド族、トリングット、ハイダ、クワクトウル、古代メキシコ、北米インディアン、インド、チベット、モンゴル、カルムイク、タタール、アフリカのズールー族など。ちなみに、アフリカ南端・ホットントットの伝承は以下のごとくです。

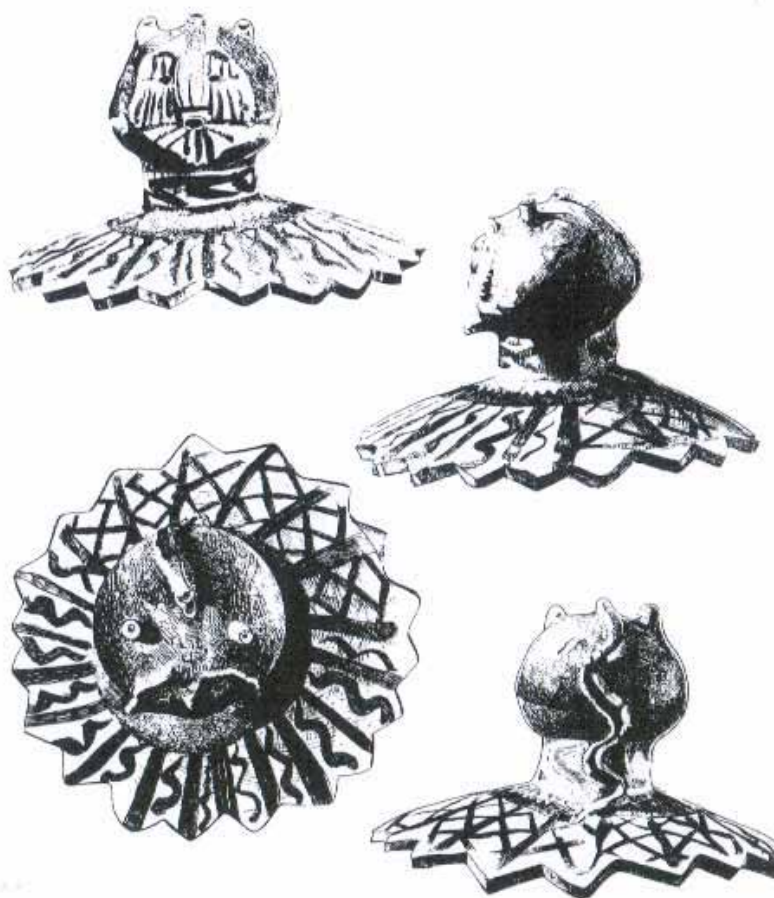
「むかし月は兎を遣わして、人間は死んでもふたたび月のようによみがえるべきことを告げさせようとした。ところが兎はこの命令を忘れてその反対のことを伝えたので、そのときから人間は死ぬようになった。月はこれを聞いて憤怒のあまり、棒を投げて兎の唇を裂いた。兎はあわてて逃げ出す拍子に月の顔を爪で引っかいた。それ以来、兎は三つ口をもっていつまでも走りつづけ、月の面は兎の爪のあとが今でも残っている——」（「月と不死——沖縄研究の世界的関連性に寄せて」『改訂版 桃太郎の母』 pp.13-49、2007.9、講談社学術文庫）

図 14 W H O のシンボルマーク



(資料) WHO

図 15 カール・ヘンツェが示した仰韶文化半山類型型彩陶 (中国甘肅省)



(資料) ネリー・ナウマン、檜枝岐陽一郎訳『生の緒 縄文時代の物質・精神文化』p.155、2005.3、言叢社

7. 「月の水」と蛇と土偶の頭

死んでゆかねばならぬようになった人間に引き返え、「蛇はその時から今まで終始脱皮し、生まれ替へて長生してゐるのだとさ」というのが「月と不死」のおちでした。蛇は脱皮するが死なない。これは、古来、世界各地の神話となって生きています。その残滓は、世界保健機関 (WHO) のシンボルマークの「アスクレピオスの杖」(Rod of Asclepius) で、ギリシア神話に登場する名医アスクレピオスの持っていた杖に蛇が巻きついています。医療・医術の象徴、即ち不死の象徴なのです (図 14)。

博物学者・生物学者・民俗学者の南方熊楠 (1867-1941) によれば、「蛇に死なし」です。「コラン・ド・プランシーの『妖怪字彙 (ジクシヨネーランフェルナル)』四版 414 頁には、欧州に

図 16 ネパリ・チョリ出土の頭部（左端）と境界石上の彫刻の一部と牡牛の頭部破片（中央、右端）

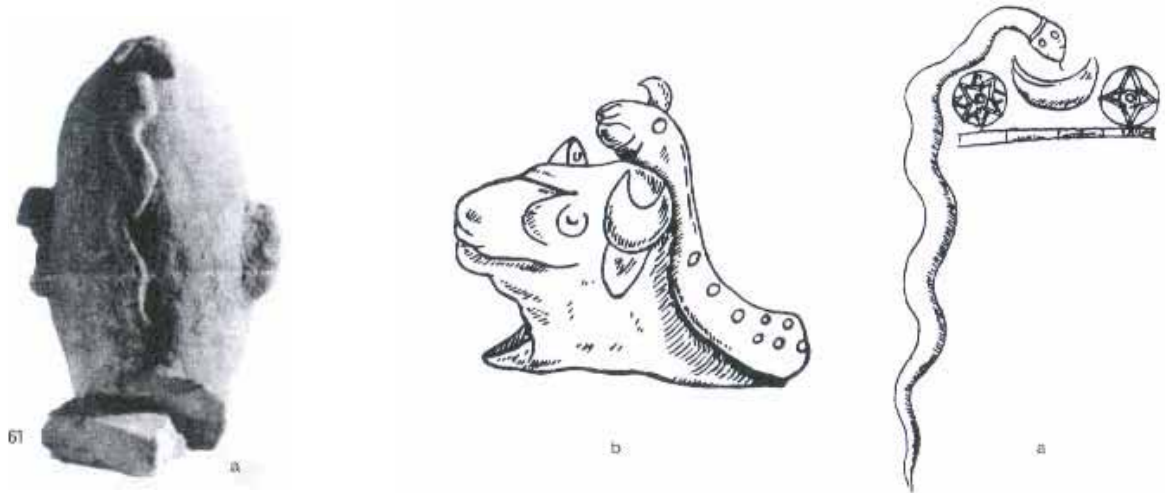


図 44 a. 境界石 (kudurru) 上の彫刻の一部: b. 牡羊の頭部破片 スーサ=Hentze 1965, fig. 21, 22

(資料) ネリー・ナウマン、檜枝岐陽一郎訳『生の緒』p.158、159、2005.3、言叢社

蛇が蛻(かわぬ) ぐごとに若くなり決して死なぬと信ずる人あるという。英領ギヤナのアラワク人の談に、往時上帝地に降(くだ)って人を視察した、しかるに人ごとく悪くて上帝を殺そうとし、上帝怒って不死性質を人より奪い蛇蜥蜴甲虫などに与えてよりこれらいずれも皮脱で若返ると。フレザーの『不死の信念(ゼ・ビリーフ・イン・インモータリチー)』(1913年版)一に、こんな例を夥しく挙げて昔彼輩(かれら)と人と死なざるよう競争の末人敗れて必ず死ぬと定たと信ずるが普通だと論じた。この類の信念から生じたものか、本邦で蛇の脱皮(ぬけがら)で湯を使えば膚(はだ)光沢を生ずと信じ、『和漢三才図会』に雨に濡れざる蛇脱(へびのかわ)の黒焼を油で煉(ね)って禿頭(はげあたま)に塗らば毛髪を生ずといい、オエンの『老兎巫蠱篇(オールド・ラビット・ゼ・ヴーズー)』に蛇卵や蛇脂が老女を若返らすと載せ、『絵本太閤記』に淀君妖僧日瞬をして秘法を修せしめ、己が内股の肉を大蛇の肉と入れ替えた。』(『十二支考』(上)、pp.233-234、1994.1、岩波文庫)

人類は、古来このかた、不死の夢をあきらめきれていない。古来とは何時のことか？

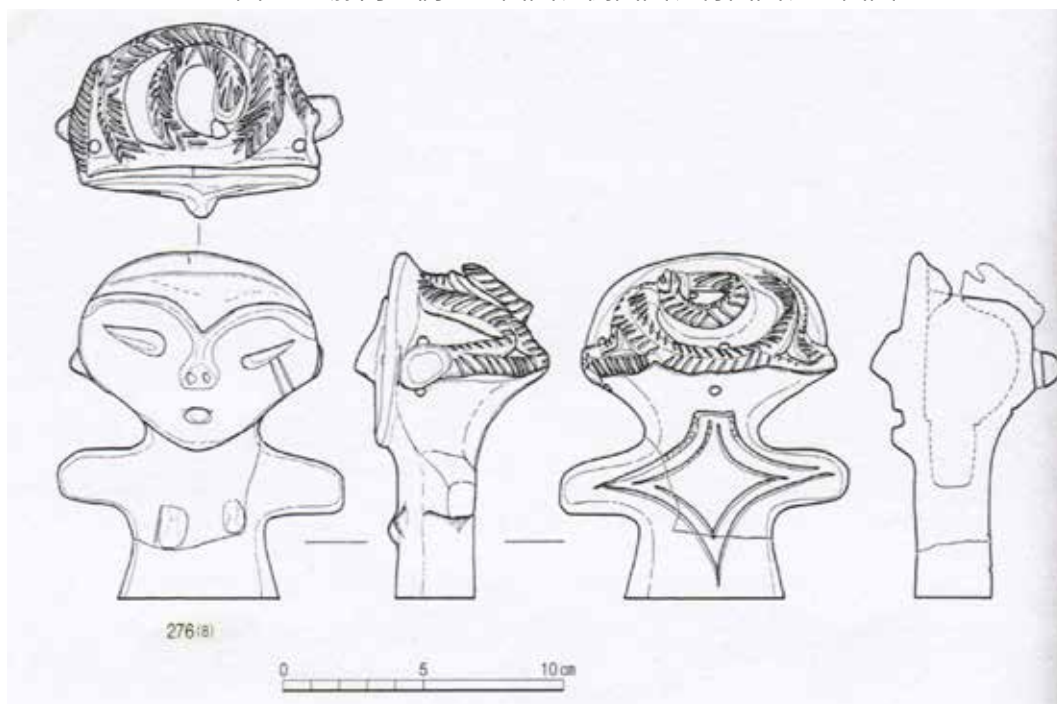
さきに「図9 仰韶文化の蛙文」を見ましたが、これと同じ仰韶文化期(BC 5000～3000年)、日本の縄文中期と同時期のこと。ネリー・ナウマンは、「カール・ヘンツェが示した仰韶文化半山類型型彩陶(中国甘肅省)」(図13の4)を持ち出しています。

「一對の角をもった人間形の神の頭部が表現されており、後頭部には垂れ下がった蛇がいる。それも登頂部の角状突起あいだに、鼻の上方の頭のちょうど中央に蛇の頭が出現している。頭像そのものは、一九に分割された星形の土台上にある。菱型が二個ずつ六区画に配され、計一二個ある。残りの一三区画にはそれぞれ波線が一本ある。一二ないし一三は陰暦を示している。神の顔面は皿のように平坦でやや窪んだ顔をしてもある。ほとんど板皿状である。少し窪んだ皿の上に、鼻と眉だけが軽い隆起で現れ、神には顔面の線が全体に走っている。」(ネリー・ナウマンのHentze 1995:180からの引用、前掲書 p.154)

確かに、蛇が首をうねり、その頭を土偶頭頂部に載せて口を開いています。ナウマンは、また、これとよく似た頭上の蛇像が、ネパリ・チョリ(トルコ東南部)から発掘された九千万年前の塑像にも見られると、その図像を示しています(図16左端)。「蛇が祭祀像の禿げた頭蓋のうしろに垂れ下がり、蛇の鋸形の頭が頭蓋の頂上にあって前向きである」。(p.157)

さらにナウマンは、ヘンツェに依拠してテベ・ギヤン(イラン西部)から出土した動物形製

図 17 藤内土偶の正面図、側面図、背面図、上面図



(資料) 樋口誠司、小松隆、小林公明編 『藤内』 2011.3、長野県富士見町教育委員会

図 18 長野県塩尻市俎原遺跡出土の蛇を頭にのせた土偶



(資料) 長野県立歴史館 『土偶展』、2019.10、p.83

品をあげています。「両角のあいだに蛇の頭があり、蛇身が巻ついている」(図 16 中央)。また、蛇の頭が三日月形の角の中間にあることの意味は、図 16 右端を一瞥すれば氷解する、と。なるほど。頭上の蛇は、水を飲んでいきます。不死の霊水、月の水に他ならないでしょう。

こうした図像からナウマンは、「人間形をした半山出土の頭部とその一対の角、またその中央に載った蛇の頭が、月神の肖像であるのはいまや明白である」と畳みかけ、藤内土偶に言及しています(図 17)。

藤内土偶の頭部にあるのは、とぐろを巻いて口を開けた蛇であることは、誰しも認めるところでしょう。「頭部にはとぐろを巻いて口を開けた蛇とみられる造形がある」「井戸尻期の人面付深鉢の人面の頭上に蛇が表わされた作品は珍しくないが、頭上に蛇を頂く土偶は類例を見ない」(樋口誠司、小松隆、小林公明編 『藤内』 p.334、2011.3、長野県富士見町教育委員会刊)。

中国甘粛省の仰韶文化半山類型型彩陶と縄文中期中葉の藤内土偶とは、ともに頭上に蛇がう

図 19 山梨県笛吹市一の沢遺跡出土の土偶



(資料) 山梨県立考古博物館 (この博物館では、この土偶を「イッチャン」と名付けシンボルマークにしている)

図 20 「縄文のビーナス」(国宝) の頭部の被り物とマイマイ



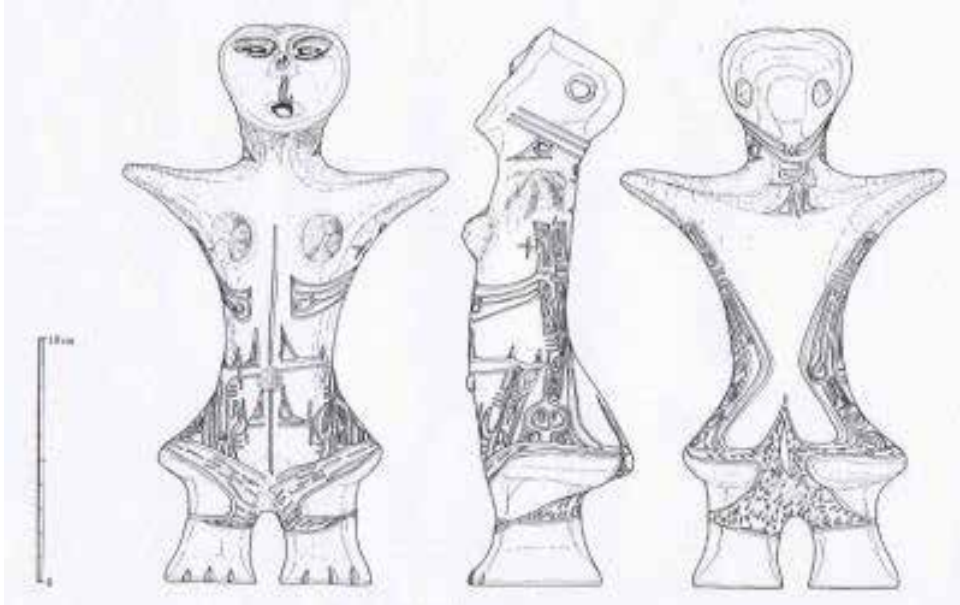
(資料)「縄文」を識る部会・茅野市尖石縄文考古館『茅野市縄文ガイドブック』2017.3、茅野市教育委員会、p.32より転載

図 21 山形県西の前遺跡出土西の前土偶(縄文の女神、国宝)



(資料)『西の前遺跡発掘調査報告書』山形県文化財センター、1994より

図 22 長野県富士見町出土の坂上土偶



(資料)『唐渡宮—八ヶ岳南麓における曾利文化期の遺跡群発掘報告』1988.9、富士見町教育委員会

ねっているところから見て、両像の共通性が察知できます。イラン西部の塑像を参照するなら、「蛇が三日月すなわち新月の光の入った皿から飲んでい。蛇はその結果、みずから永遠の変質と復活を確実にする」という姿が、よりはっきりします。

ほかにも、縄文中期中葉の、多くの土偶の頭には、蛇が蜷局を巻いています。古くは山梨県韮崎市坂井遺跡出土の土偶頭部など、新しくは長野県塩尻市俎原遺跡出土土偶(図18)、山梨県笛吹市一の沢遺跡出土の土偶=いっちゃん(図19)など。このほか、新潟県長岡市馬高(うまたか)遺跡出土土偶、富山県八尾町長山遺跡出土土偶、新潟県糸魚川市長ヶ原土偶、山形県西の前遺跡出土西の前土偶(縄文の女神)などもあり、これらについては第6回論考で論じています。様式化が進んで、蜷局を巻く蛇がマイマイに変じた国宝「縄文のビーナス」の頭上の蛇については、図20の頭部の被り物とマイマイを参照し、第6回論考をご覧ください。

これら頭上の蛇は、それぞれ凹んだ皿のごとき容れものに収まっていることも見逃せません。典型は国宝「縄文の女神」です。この土偶の頭上には、蛇は見当たりませんが、後頭部全体が大きな皿になっています。蛇とともに月の水を入れることが約束されている。そうだとすれば、この皿は、縄文中期中葉の承露盤、あるいは「鑑」と同類の月の水を採る容器であった可能性が浮上します。

「縄文の女神」(図21)は後頭部が皿になっていますが、中期後葉(4500～4000年頃)になると、顔が皿のごとくに窪んで凹状になった土偶があらわれます。長野県富士見町坂上遺跡出土の坂上土偶です(図22)。「両腕を大きく広げて胸を張り、顔は斜め上を向いて空をように立つ姿は、大地や自然の恩恵を全身で受け止めているようでもあり、天に向けて何かを願っているようでもあります」(『坂上遺跡出土土偶 重要文化財指定記念講演録集』p.63、2016.3、井戸尻考古館)。

ナウマンは、この坂上土偶の他に、それ以後の土偶で、顔が凹型に窪んだ群馬県郷原遺跡出土のハート型土偶や、神奈川県稲荷山貝塚出土の筒形土偶などもあげて、断じています。

「窪んだ顔をもつ土偶は、蛇が頭に載った藤内土偶も含めて月神の表現だとする本論の確信を裏づけている」と(同上、p.166)。

8. 縄文人は月の「生」に自分自身を再認識した

さて、以上、5～7において、ネリー・ナウマンと小林公明の、月の水取り探求の跡を、かなり荒っぽくトレースしてきました。

小林公明の出発点は、中期中葉の曾利遺跡出土の有孔鏢付土器と、同時代の中国仰韶文化の彩陶の蛙文の比較検証でした。そして中間点の長沙馬王堆帛画「月の中の蛙」との比較対象で、神話の構造を明らかにし、終着点で蛇を頭に載せた藤内土偶に行き着いていました。この三者を引き比べ、共通点を見出していった結果、月と蛇と、月の水を浮上させたのです。

また、ネリー・ナウマンの出発点は蛇を頭に載せた藤内土偶で、これをカール・ヘンツェが示した中国甘粛省の仰韶文化半山類型型彩陶などと引き較べて、頭上にくねる蛇を見出していました。比較する図像がインターナショナルで、国籍にこだわっていないのは、人類の営みの普遍性に対する信念からでしょう。彼女が日本の縄文土偶の造形に発見したのは、頭上に蝮局を巻く蛇と、月の水をとるための容器でした。この図像学の論理展開には、われわれにとって馴染みの実証科学精神に反する論理が使われています。言うまでもないことながら――

◆月の死——月は死ぬわけがない。死とは生物の命がなくなることで、地球の衛星である天体に、生死を言うは非科学的である。➡朔を月の死と表現するのは、レトリック（修辞法）で、暗喩である。

◆月の復活——死がないのだから、生き返りもあり得ない。朔望は、月の公転によって地球から見た太陽と月の位置関係が、変化することで起こる天体现象である。➡朔望を、月の生と死としてたとえることはありうる。

◆月の水——NASA（アメリカ航空宇宙局）によれば月に水は存在するが、採取するのは難しい。承露盤におりる甘露は夜露に他ならぬ。土偶の頭の上の受け皿も空しく、夜露の採取に終始する。➡夜露を不死の甘露と詐称し皇帝をたぶらかしたのは、道教の仙人、即ちシャーマンの類に他ならぬ。

◆不死の蛇——WHOのシンボルマークにあるように、蛇は古来インターナショナルに不死の象徴となっている。脱皮して成長するさまが不死神話、人類の願望の象徴となっている。➡蛇は棒きれ一つで殺せ、簡単に死ぬ。WHOの願いむなしく、死なない生物はあり得ない。

以上のように、非実証科学的論理、レトリック（修辞法）がキーワードとして使われているところから、図像学を敬遠する向きが多いのではないかと思います。これに対して、小林公明自身は、以下のように反論しています。

「古代の図像を通じて現在の精神を知ろうとするには、その時代なりの考え方をすることである。今日の科学を万能とし、科学的に分析すれば何かが分かるなどという態度は、ゆめゆめ慎むべきである。実に近代科学こそが、そうした世界を滅ぼし去ったのにほかならない。」（『富士見町史 上巻』 p.438）

そもそも、人が死なないという非実証科学的な願望によって成り立っている幻想の体系を、実証科学的にとらえようとする自体が背理です。神は信念の産物に他ならず、神を実在として科学的に証明しようとするのは原理的に不可能です。ちなみに2万数千点の発掘成果をあげながら、その正体を全く明らかし得ていない縄文考古学の実情を見てみましょう。

日本の考古学はエドワード・モースが大森貝塚を発見（1877年）して以来、実証科学論が提唱されたのは19世紀で、自然科学が興ったのはせいぜい17世紀です。それ以前の時代において、人類はいかなる方法によって物事を考えて来たのか。それを探求したのは、J. G. フレーザー（1854-1936）『金枝篇』ではなかったか？

フレーザーの説によれば、人間のものの考え方は、基本的には初期の段階は呪術的で、次いで宗教的になり、それから科学的になる。呪術の原理は二点に帰着する。

「一つは、似たものは似たものを生み出す、言い換えれば、結果はその原因に似るということだ。もう一つは、かつて互に接触していたものは、その後、物理的な接触がなくなったのちも、引き続きある距離をおきながら互に作用しあうということだ。前者を「類似の法則」と呼び、後者を「接触の法則」あるいは「感染の法則」と呼んでもよい。このうち第一の「類似の法則」の原理から、呪術師は、どんな事象でもそれを真似るだけで思いどおりの結果を生み出すことができる。また、第二の「接触あるいは感染の法則」の原理から、呪術師は、誰かの身体とかつて接触していたものにたいして加えられた行為は、その接触していたものがその人物の身体の一部であったにせよ、そうでなかったにせよ、その行為とまったく同じ結果をその人物にもたらすと考える。」(『図説金枝篇』吉岡晶子訳、pp.83-84、2022.4、講談社学術文庫)

第一の「類似の法則」の典型例は、雨乞いでしょう。雨を降らせようとして、水をふりかけたり雲の物真似をする。月の満ち欠けと人の生死、月の死と人の死、月の復活と人の復活も、「類似の法則」に当たるでしょう。第二の「接触あるいは感染の法則」については、憎い相手に見立てた藁人形を釘で打ち込む呪いの丑の刻参り(うしのこくまいり)を思い起せばいい。

呪術には、理論的呪術と実践的呪術とがあるが、「要するに、呪術というのは人を導いて惑わす行為であると同時に、自然の法則の体系に見せかけたものであり、まやかしの科学なのだ」とフレーザーは断罪しています。但し、それは科学の時代の20世紀にあってのことです。科学なき時代やところでは、理論的にも実践的にも、まやかしの科学が猖獗していた。否、呪術全盛であったと言うべきでしょう。『金枝篇』全13巻はヨーロッパのみならずアジア、アフリカ、アメリカなど全世界各地の残存する呪術事例を夥しい数を渉猟しています。

では、まやかしにも拘らず信じられる呪術的思考とは、どのような思考方法なのか？ネリー・ナウマンが深く学んだ宗教学者ミルチャ・エリアーデが、未開人、古代人の認識方法を解き明かしてくれています。それは分析的思考に慣れた精神の持ち主である現代人には把握し難い認識方法です。

肝心要のことは、部分に分解してならない。月の機能、力、属性なら、分析的、集積的に理解するのを避けなくてはならない、と注意を促しています。

「われわれ近代人は、ひとつの全体として、直観的に知覚したものを、因果関係として説明する。われわれは、「それゆえに」とか、「そのために」とかいうことばを用いるが、古代の意識において、そうしたことばが相当するのは、「同じように」である。(たとえば、月が水を支配するがゆえに、植物も月に従う、などとわれわれはいうが、実は、植物も月も、同じように、月に従う、というべきなのである)。月の「力」がみいだされるのは、一連の分析に努めた結果ではなく、直観によってである。そうすれば月はずっと全体的にあらわれてくる。その場合、古代人は意識の中でつくりだされる類似は、象徴の働きによって、多彩になる。」(『エリアーデ著作集 第2巻』久米博訳、p.11、1981.5、せりか書房)

呪術的思考は実証科学的方法ではなく、象徴的思考——あるものを象徴的にとらえようとするシンボリズム(象徴主義)に他ならなかったのです。レトリック(修辞法)として、月の満ち欠けを月の生と死にたとえる如く、同じように直観的に、朔を月の死、朔望を月の生ととらえる。月が生と死をくりかえす、人も生と死をくりかえす。そうありたいという願望がこうじて、直観的にますます全体的あらわれ、人も生と死をくりかえすことが確信されるに至る。これが古代の直観的な認識論なのです。

そういえば、江戸の時代の名句があります。

名月をとってくれろと泣く子かな（小林一茶）

われわれは、中秋の名月、お月見の月の中では兎が餅をついているのだ、と親から子へと教えられたものですが、『新釈漢文大系 第54巻 淮南子（上）』によれば、兎の菓擣（くすりつ）きの物語が誤って伝えられた結果だそうです（図11、『新釈漢文大系 第54巻 淮南子（上）』p.319）。

月は「生きて」おり、それ自身、はてしなく再生し続けてやまないのです。

「古代人の意識において、月の宇宙的運命を直観することは、人間学の基礎を据えることにひとしかつた。つまり、人間は月の「生」の中に自分自身を再認したのである。その理由は、すべての生物の生命がそうであるように、人生にも終わりがあるから、というだけではない。何よりも、「新月」という現象によって、月は人間の再生への渴望、「新生」の希望を価値あらしめてくれたからである。」（同上『エリアーデ著作集 第2巻』p.12-13）

9. 農耕の発見と宗教革命

考古学者から無視されてきたナウマンや小林公明の縄文研究を再評価した大島直行『月と蛇と縄文人』は近来稀な好書ですが、一個所、気になる所があります。

「ナウマンは、縄文人は満ち欠けにより姿を変える月を「死と再生」になぞらえたと考え、そこに月がこの世のすべての水をもたらし、人も動植物も「月の水」によって生かされていると考えるのは、科学が興る以前の狩猟採集社会の共通した思考方法だったと指摘しています（『生の緒』）。だから縄文土偶の造形にも、月を象徴した図像がちりばめられているのだと考えたのです。」（傍線引用者、同上『月と蛇と縄文人』p.93）

この傍線部分の記述が『生の緒』に見つからない。この一文に接して、私が疑念を抱いたのは、ナウマンではなく、大島直行の縄文時代の基本認識です。別の個所では「農耕社会の合理的・科学的思考法の影響を受けていない縄文時代は、きわめて純粋な形でものごとが象徴的に思考されていた」（同上p.303）と言っています。果して、縄文時代中期（約5000～4000年前）は狩猟採集社会だったのか？

エリアーデの『世界宗教史Ⅰ』（中村恭子訳、1991.6、筑摩学芸文庫）によると、月の満ち欠けの観察に基づいて時間表示の象徴体系を発見したのは、約1万5000年も前のこと。縄文時代の開始とともに縄文人は、月の満ち欠けを観察して暮らしを立ててきたのです。

「一九六〇年以来、集落は農耕の発見に先行するということがあきらかになった。ゴードン・チャイルド〔1892-1957〕が「新石器時代革命」とよんだ過程は、前九〇〇〇年と七〇〇〇年のあいだに徐々に進行した。ごく最近までの通念とは反対に、穀物栽培と動物の家畜化が、土器の製作に先立つことも判明した。いわゆる農耕、すなわち穀物栽培は、西南アジアと中央アメリカで発達した。根茎、あるいは根茎の野菜としての再生産に依存する「植物栽培」はアメリカや東南アジアの高温多湿の平野に起源をもつと思われる。」（pp.67-68）

ここには、集落→農耕（穀物栽培と動物の家畜化）→土器の製作の時間軸が示されています。縄文土器の製作に先行して農耕が行われていたというのがエリアーデの観点のほかならない。

「文明史にとって、農耕の発見の重要性は強調するまでもないことである。自分の食料の生産者になることによって、人間は先祖伝来の行動を変更せざるをえなかった。」「農耕の発見の影響は、人類の宗教史にとってもひとしく重要である。植物栽培は、それまで近づくことが不可能であった実存的状況をもたらした。結果的には、それは、新石器時代以前の人々の精神世界を根本

的に変革する、価値の創造と転倒をひき起こしたのである。」(p.69)

農耕の発見→先祖伝来の行動を変更→人々の精神世界を根本的に変革。即ち、穀物栽培の成功によって宗教革命が起こったのだとエリアーデは言っているのです。

では、宗教革命とはいかなるものか？ これはエリアーデの『大地・農耕・女性——比較宗教類型論』(堀一郎訳、1968.1、未来社)の方で、より端的に語られています。

「俗的技術でありつつ、しかも儀礼でもある農耕は、死者の世界と、全く異なる二つの段階で触れ合うのである。第一のものは大地との連帯性である。種子のごとく死者もまた埋葬され、彼らの達し得る大地の次元に入って行く。つぎはまた、農耕はいちじるしく多産であり、成長によってそれ自らの子を産むという生命処理を行う。そして死者はとくにこの再生の、創造の周期の、そして無尽蔵の豊穡の神秘によって生かされる。大地の母の胎に埋められる種子のごとく、死者はその新しい形態に生きるべく、その復帰を待っている。」(同上 p.258)

以上のごとき農耕の発見による宗教革命を見ると、ミルチャ・エリアーデの宗教論に依拠したネリー・ナウマンが、縄文時代中期(約5000～4000年前)を狩猟採集社会と想定していたとは思われません。

日本の縄文考古学主流は、縄文時代が狩猟採集社会だと信じてやみませんが、最近は少し様相が変わって来たようです。谷口康浩(國學院大学教授)の最新著作には、中期農耕(ダイズ、アズキ)の容認が見られます。

「近年の植物考古学の進展には目を見張るものがある。特にレプリカ法による土器の種実圧痕の研究がすすみ、中山誠二・小畑弘己らの精力的な研究によって、中期の中部地方でのダイズやアズキのマメ類が栽培化されていた事実が明らかとなった。中期にダイズ・アズキの種子サイズが大形化し現生野生種の上限值に近づいていたことは、出土炭化種子・土器圧痕資料の検証からも確認されている。また、集落周辺における人為的な植生改変とクリの栽培化を示す証拠も増えてきた。関東地方西部の内陸部で打製石斧が急増した要因については、自然薯(ヤマイモ)の何らかの人為的増殖が始まっていたとする説もある。井戸尻・勝坂文化の安定と発展は、こうした植物栽培技術の獲得によって支えられていた可能性が強まった。」「井戸尻・勝坂文化を生み出した人々は高度な植物利用技術を獲得しており、クリやダイズ・アズキの栽培技術をも有していた。勝坂系土器の著しい発達は、こうした内陸性の植物栽培文化と密接に関連していた可能性がある。」(『土偶と石棒』pp.209-210、2021.12、雄山閣)

稲作については農学者の佐藤洋一郎(静岡大学教授)が、プラントオパール(ガラス繊維質)研究で証言しています。「縄文時代にイネはあった。いや、正確にいうならば、縄文土器を作った人びとの暮らしの中にイネはあった。それでも米はなかったと主張するためにはよほどの説得力のある証拠が要求されるであろう」(佐藤洋一郎『稲の日本史』pp.20-27、2002.6、角川選書)。

ちなみに、国宝・合掌土偶が出土した青森県八戸市風張1遺跡(縄文後期後半)は、何を糧としていたのか？ 文化庁国指定文化財等データベースには以下のようにあります。

「土偶は16箇あり、これらの中には「合掌土偶」(図23)と称される立て膝、両手を合わせた土偶(高19.8センチメートル)や、「腕を組む土偶」など、当時の習俗を知るうえで貴重なものが含まれる。」

「また本遺跡では、住居跡内から炭化米〔7粒〕が出土している。この炭化米は、放射性炭素による年代測定で、本遺跡が営まれていた縄文時代後期のものであることが確かめられた。はたして、当時、当地で水稻栽培が行われていたかは明らかでないが、目下のところ、わが国最古級の"米"の実物資料であり、これはその学術性を重視して2粒を附指定とした。」(傍線引用者)

当時の水田栽培をする遺構は発見されていないが、縄文のイネは熱帯ジャポニカ種であって、水稻ではなく陸稲(オカボ)であることが佐藤洋一郎によって探求されています。

図 23 青森県八戸市風張 1 遺跡出土の合掌土偶（国宝、縄文後期後半）



（資料）東京国立博物館『縄文——1万年の美』 2018.7

発見された米粒7粒のうち2粒が、北海道大学農学部の吉崎昌一（1931-2007）のはからいでカナダのトロント大学に送られ、その測定によって、約2800年前（縄文後期～晩期）のものと判定されたのです。この縄文の米の発見は、衝撃的なことであったにもかかわらず、縄文考古学の世界では今に至るも無視されているかに見えます。その理由を詮索するのは、ここでの課題ではないので別の機会を期すことにします。ここでの関心は、風張部落において、米ががつくられていたからには、米が食されていたに違いないことです。

象徴的に言うなら、「国宝」合掌土偶シャーマンは月の水を飲み、米を食べていたのだ！